



写真1 台湾, タロコ峡谷, 長春祠のやや上流, 結晶質石灰岩の一枚岩の谷壁
(左岸側の道は廃道と思われる.)



写真2 台湾，タロコ峡谷，燕子口付近，溶食の特色を示す谷壁断面，トンネルの道は東西横貫公路（右岸側）。

台湾，タロコ（太魯閣）峡谷の地形

式正英

造山隆起量の著しく大きい台湾の地形景観は、まことに素晴らしいものが多い。台湾島の脊椎にあたる台湾山系の中央山脈には3000mを越える高峰が40座もあり、最高所玉山（3997m）は殆んど4000mに達する。古生代末期から第三紀中新世に及ぶ堆積岩及び変成岩がNNE-SSW方向に帯状に配列して山地を構成している様子は、日本列島の赤石、紀伊、四国、九州山地のいわゆる外帯の構造とそっくりである。但し玉山は始新世、南湖大山（3798m）は中新世の地層から成る。赤石山地の中新統の最高所は身延山地で2100m前後であるから、台湾では大ざっぱに云って同時代層が更に1500mも高い位置まで隆起させられていることになる。

タロコ峡谷は中央山脈のやゝ北寄りの合歓山（3416m）付近に発し東流する立霧溪（リー・ウー・チー、日本名はタッキリケイ）が刻む河谷の下流部にあたっている。主山稜から東に落ちる必従河川だが、地質構造には見事に直交して横谷をなす。花蓮の北25kmの新城の西に谷口が位置し、そこから上流20kmの天祥までの間が、殆んど結晶質石灰岩すなわち大理石が露出する。ここが典型的な峡谷部となる。壮大な岩壁の連続する様は、筆舌につくし難いほど圧倒的で、これ程大規模な峡谷美は充分世界に誇るに足りる。谷壁は比高1000mに及び、巨大な塊状の石灰岩の一枚岩が随所に載り立っている（写真1）。写真に撮れている高さだけでも約120m。東西方向の河道は地質構造を横断しており、垂直に近い層理が好く示される。数本の鋭い刻みは走向断層とみられる。

峡谷は河道の巾がそのまま大地にめり込んだ形を呈している。つまり河食の主体は石灰岩地特有の溶食にあり、谷壁の断面は単純な直線状ではなく、吸込み穴の壁が上下にいくつか連続したような複雑な形をとっていることに注意して欲しい（写真2）。造山運動による急激な隆起に伴う河川の「溶食下刻」が、この特徴的な峡谷地形をつくって来たものであろう。

（Taroko Gorge in Taiwan, Photo by M. Shiki, on Marh 27, 1981）

お茶の水地理 23（1982）